後期万葉の皇族たちは、橘諸兄、奈良麻呂の橘氏や大伴家持を中心としてそれぞれサロンを形成していた。特に大伴家持は多くの皇族と親交があり、それがいくつものサロン形成に繋がったのであろう。

後期万葉における皇族の宴席歌は橘諸兄、橘奈良麻呂、大伴家持の存在が大きくこの存在なしでは後期万葉のサロン形成は成し得なかったのである。

万葉歌人市原王

――カグハシ表現をめぐって――

河澄　祥代

万葉集において、香りに関する歌というものは非常に少ない。そのことは本居宣長が著書「玉勝間」において紹介している。その中で数少ない香りに関する歌として挙げられているのが四五〇〇番にある市原王による梅の歌である。

万葉集には梅を扱った歌が多く存在する。梅の花がその白さから雪との対比で歌われること、花が散るさまを歌うのは周知である。だが香りに注目して歌われるのはこの一首のみである。本居宣長はこの数の少なさから、この時代に香りは愛でられなかったとしているが、はたしてそうなのだろうか。

本稿では万葉集に存在する香りに関わりのありそうな語と対象となる事物をあらためて探しだし、その語の使われ方や歌われ方を考察した。その結果、ニホフ・カヲル・カグハシの語があることがわかり、ニホフは主に視覚的であることがわかった。カグハシについては対象は橘が多く、梅を対象とする歌は一首みられた。またこの橘もほとんどが「玉に貫く」といった薬玉を対象とした歌われ方である。

香りは漢詩には多く詠み込まれることや、歌の序としては詠まれていることがわかった。愛好の対象とされていたのである。

ではなぜそれが和歌には反映されないのか。漢詩や序には歌われる香りと和歌での香りには違いがあるのだろうか。本稿では他の数少ない香りを詠み込んだ歌や、その歌を作った人物と市原王との関わりを中心に考察した。

万葉と文雅

――風流侍従門部王について――

菊畑　瑞穂

万葉第三期、「風流侍従」と称される人達の存在したことが、「家伝　下」に記されていることは、既に広く知られている。その列挙された中に「門部王」の名がある。門部王は、集中に五首の和歌を残している。その数は、万葉歌人として多いほうではないが、「風流なる侍従」と呼ばれた万葉歌人がどのような歌を残したのだろうかと思い、その五首について作品性を知ることを試みた。また、「風流侍従」についても考察した。

結論として、門部王の歌は五首各々において単純なものではなく、技巧の凝らされた味わいのある作品性を持つものであった。景を叙述し抒情に用いる技法を得意とし、またその景を序詞に用い、情を強める歌い方もした。また、人麻呂の模倣と言われる作の中にも、門部王独自の歌い方がされており、作品性において両者を比較する上で人麻呂の作が高く評価されていることに対し、それは「時代的傾向」の相違とみて各歌が持つ性質は異なると考察した。万葉歌人であり、「風流侍従」でもある門部王ならではの歌い方だった